

「心の四季」を歌うにあたって その1

とうとう来年には還暦を迎える歳になって漸く「心の四季」を味わえる^{よわい} 齢になったという実感が、私自身にある。

「心の四季」との出逢い...それは私がサブコンをしていた二年の定演、当時の学生指揮者岡本信宏氏の指揮で初めて歌った...そのときは、確かにとてもきれいな曲だけど、やはり「水のいのち」には勝てないなどの思い込みがあった。そして、それをステージ袖で聴いていた福永先生はといえば、学指揮に先を越されたのが気に食わなかったのか、或いは自分ならこう振るぞと歯痒い思いをしたのか、今となってはそれを確かめる術はないが...翌年の六連には「心の四季」をやるからと言って、早々に自身の楽譜を私に手渡した。

最初の自分の練習までに楽譜に書いてあること全てを全員に徹底するように、との指示を受けた私は、譜面を開いてまず驚いた。赤・青・黄色などの色鉛筆でビッシリと指示事項が記されていたからだ。そして期待とは裏腹に、すぐにそれは落胆の気持ちに変わってしまった。私としてはこの曲が「水のいのち」には劣ると考えていたとはいえ、当時の合唱団がこぞって歌っていたこの名曲を福永先生はどう振ってくださるのだろうかとの大いなる楽しみがあった。それが、その正解が、既に譜面上に全て書き連ねてあったのだから、学指揮として羽ばたこうとしていた青年からすれば酷な話しであったことは間違いない。でも練習が始まってしまえばそんな考え方は全て取り越し苦労だったと思い知らされることになる。先生は譜面に記していない、譜面には著すことのできない本当の音楽を私達に一つ一つ丁寧に説いていかれたからだ。以降青年は、先生が訪れる度に魔法のような時間を体験する訳だ。

「心の四季」の詩と音楽には不思議な力があると思う。

青年で感じたその初々しさ、ときを経て年輪を重ねて改めて知る深さ。一回歌ってしまえば二度と歌われなくなる流行りの合唱曲が溢れている中「心の四季」は本当の意味で永く付き合える作品である。他団体がしばしばこの曲を取り上げて歌っているのを聴くにつけ、37年前、ステージ袖で同じく歯痒い思いをしていたであろう先生の気持ちと重なるような気がしていた。それを再びアカデミーの仲間たち、そして久邇先生のピアノで実現出来ることはこの上ない喜びである。このチャンスを私は大切にしたい。

T.Ozaki

次回は曲全体の構成から一つ一つの曲に触れてみます。

2017/5/12